様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ２７ 日現在

機関番号：３０１１５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６５３２３３

研究課題名（和文）「多読ｔｏ読書」：ＹＡ文学を利用した英語多読教育から生涯教育への橋渡し

研究課題名（英文）Nurturing L1 Reading Habits: Developing Japanese Reading Habits through English Extensive Reading Practice

研究代表者
荒木　陽子（Araki, Yoko）

北海道情報大学・医療情報学部・准教授

研究者番号：９０５１１５４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により英語多読学習用の書籍群へYA文学やクロスオーヴァー文学を組み込み、その翻訳や関連書籍を日本語で読むことを奨励し、読書量の増加しようとする試みは容易ではないことがわかった。ただ2年間にわたり学生の読書傾向を追跡することにより、英語圏で人気のYA文学よりも、むしろなじみ深い「名作」や映画の原作の方が、学生の読書を増加させる傾向、さらには、1年次に多読専用図書以外に手が伸びた学生の多くが、大学入学以前より読書習慣を持っていること、さらには読書が好きでも「忙しさ」を理由に2年目には読書をしていないことなど、大学入学以前の読書習慣を生涯教育へとつなげていくために重要な情報を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study, which includes a 2-year “in-class” experiment targeting 1st and 2nd year Japanese university students whose majors are not in English, indicates that it is not an easy task to foster their L1 reading habits through L2 extensive reading practice in their English classes. Encouraging students to read popular contemporary North American YA literature and its translation, in particular, presents difficulties while crossover literature (the classics and literatures which appeal to a wider range of readership) garners more readers. Questionnaires and interviews conducted for this study also give researchers valuable information on university students’ reading habits in the mid-2010s. For example, students who attempted to read English books other than graded readers often had developed their reading habits in their primary and secondary schools; the business of their daily life prevents self-claimed book lovers from readings for their own general interests.

研究分野：英語圏文学

キーワード：生涯教育　ヤングアダルト文学　クロスオーバー文学　児童文学　英語教育

１．研究開始当初の背景

筆者は北米英語圏文学、英語教育（特に、英語多読学習法）、大学生の読書習慣等を研究している。特にカナダの作家バッジ・ウィルソンの作品の研究をきっかけに、研究開始時はあまり日本で体系的な研究がなされていなかった、北米、特にカナダのヤングアダルト文学に関心を持ち、（のちには、その関心をより広い読者層を想定したクロスオーヴァー文学に広げ、）研究をしていた。そのため、複数の研究領域を横断して、英語圏のヤングアダルト文学を英語多読教育と結びつけることで、日本の教育現場、特に読書教育、生涯教育の分野においても有効に利用できるのではないかと考え、本研究に至った。

２．研究の目的

北米英語圏のヤングアダルト文学をめぐる現象とその教育現場における活用状況について明らかにすることにより、北米のヤングアダルト文学を英語多読学習から生涯教育を焦点に入れた「読書一般」への橋渡しとして、日本の教育現場、特に大学において活用する可能性を探ること。

３．研究の方法

（１）平成 24～25 年度

①文献調査を通して、北米英語圏における YA 文学とは何かを明らかにするとともに、代表作品のリストアップを行い、北海道大学図書館の英語多読学習向け図書群に加える。

②文献調査を通して、北米の学校教育の現場におけるヤングアダルト文学の利用状況を明らかにする。

（２）平成 26 年度

①「多読 to 読書」研究対象グループを平成 26 年度入学生のうち筆者の担当する基礎英語クラスを履修した学生 59 名に設定。

②上の対象グループに対して、「多読 to 読書」の実証実験を行うため、平成 26 年度 4 月に英語多読学習を導入。その後、平成 26 年 7 月にヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学に関しても導入。

③授業中、学生に教養を獲得する上での読書の有用性を説き、英語多読学習で読んだ書籍や、それと関連する書籍を日本語で読むことの意義を伝え、読書することをすすめる。

④グループの読書行動を読書ポートフォリオとアンケートを用いて観察し、実際に「多読 to 読書」、図書館の利用拡大、その他のプラスの効果の有無を分析すると同時に、「多読 to 読書」がうまくいかない場合は、その理由を明らかにする。アンケートは平成 27 年１月に実施。

（３）平成 27 年度

①平成 27 年度は、筆者担当の実用英語クラス 29 名を対象グループとして設定。特に、1 年次から継続して履修した 2 年次の学生 7 名について、実践 2 年目の追跡調査を行う。

②学生の「多読 to 読書」への移行を助けるために、ウェブサイトを作成。英語多読学習、およびヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学についての解説とともに、大学図書館所蔵の多読学習用図書と、その翻訳、関連図書等の図書館所蔵状況を示したリストを掲載し、学生に使用を促す。

③学生に「多読 to 読書」をさらに訴えるために、図書館の多読図書コーナー脇に、その翻訳及び関連図書群を展示用ワゴンに集め配置。ポスター等も掲示。

④平成 28 年 12 月に「多読 to 読書」の効果を測定するために、アンケートを実施。前年度から継続してプロジェクトに参加した 7 名に関しては、アンケート結果を踏まえ、「多読 to 読書」がうまくいかない理由を明らかにするための、インタビューも平成 28 年 1 月に実施。

４．研究成果

（１）文献研究の成果

平成 24 年度から 25 年度にかけては、英語多読学習用図書、およびそこに加える英語のヤングアダルト向け図書の選定のために、若い読者層のために書かれた、ヤングアダルト文学に関する先行研究について研究を進めた。また、同時進行でヤングアダルト文学の作品研究も行った。

　その結果、隣接・重複ジャンルとして、本来子どもや若者のために書かれたが、大人の間でも広く読まれる文学（または逆に大人のために書かれても若い読者層の間で楽しまれている文学）で、世代を超えて読み継がれる多くの「名作」文学や映画化された文学を含むジャンル、クロスオーヴァー文学の存在が浮かび上がり、このジャンルもまた学生にアピールし得ることがわかった。そのため、この分野の作品も、図書館の多読学習用の書架に加えることになった。

　実際、後述する実証実験のアンケートとインタビューの結果からあきらかになったのだが、2 年間にわたる実証研究の最終段階において、学生の日本語の読書に結びついた図書は、ヤングアダルト文学よりは、むしろク

ロスオーヴァー文学に該当する作品が多かった。特に学生は、J.K.ローリングの「ハリー・ポッター・シリーズ」、マイケル・クライトンの「ジュラシック・パーク・シリーズ」などのシリーズ化され、さらに映画化された作品や、ウィリアム・シェイクスピアやサミュエル・ベケットらの純文学を含む、いわゆる名作文学を読み進めることが多いことがわかった。

（２）実証実験の成果

①1 年目（平成 26 年度）

平成 26 年度の「多読 to 読書」プロジェクトでは、主として英語多読学習の導入から、英語多読学習用に開発された Graded Readers 以外の、英語で書かれた図書としてのヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学の導入および、読書の実践がその主体となった。

平成 26 年 4 月から平成 27 年 1 月まで行われた実験の結果は論文（１）にあげた「『多読 to 読書』プロジェクト 2014――英語多読学習を介した日本語読書習慣作りにむけて――」にまとめた。

実験対象グループは平成 26 年度入学生のうち筆者担当の 59 名であったが、年度末のアンケートに協力した学生は 48 名であった。また、対象グループと比較するためのコントロール・グループのアンケートには 134 名が回答した。アンケートの結果から、授業等で導入がなされるか否かで、学生の英語多読学習、ヤングアダルト文学の存在自体の認知度が大きく異なることがわかった。実験対象グループでほぼ 9 割の学生が英語多読学習、8 割がヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学というジャンルを認知しているのに対して、コントロール・グループの学生のうち、それらを認知している学生は、1 割に満たなかった。

さらに平成 26 年度の研究は、ヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学というジャンルの認知度に現れた大きな差にも関わらず、そのジャンルの概要について説明した後、日本語でそれらのジャンルに該当する本の読書経験を問うた場合、グループ間の認知度に関する差は 10%に満たないことを示した。また、今後同ジャンルの書籍を読んでみたいと答えた学生数の差も約 3%と、グループ間で大きくはない。つまり、学生のヤングアダルト文学や、クロスオーヴァー文学に対する関心自体はグループ間で大きな差がないことから、授業など何らかの形で、適切な導入と「時間」を与えれば、学生が読書をする可能性は格段に上がることを示す。

また、平成 26 年度プロジェクトは、当初想定していなかった多読学習が「ついで読書」というルートで、学生の読書量を増加させる可能性を示した。当初学生が英語多読学習で読んだ本、ないしは関連の図書を日本語で読む形で、読書量を増加させることを想定していた。しかし、アンケートの結果、研究対象グループのうち約 4 分の 1 の学生が、英語多読学習用の本を借りに図書館に行った際に、多読学習で読んだ本とは関係ない書籍を「ついでに」借りて読んでいたことが明らかになった。

② 2 年目（平成 27 年度）

平成 27 年度の「多読 to 読書」プロジェクトにおいては、筆者担当の実用英語クラス 29 名(実際にアンケートに答えた学生は 18 名。うち 11 名は本年度が多読学習初年度）を対象グループとして、特に前年度から継続して履修した 2 年次の学生 7 名については、実践 2 年目の追跡調査を行った。27 年度については授業内の多読学習は実施回数を減らし、月に 1 度程度の実施とした。

第一の研究成果は、平成 26 年度は学生の英語多読学習から多読以外の英語で書かれた文学作品への移行が低調（12.5%）であったことから、その移行を助けるべく、ウェブサイト (http://www.arakiproject.jimdo.com)を制作し、授業で使用したことである。

第二の研究成果は、同ウェブサイトの導入とともに、大学図書館の協力を受け、英語多読学習用図書の書架（写真１）の向かいに、その翻訳や関連図書を展示する、「多読 to 読書」キャンペーンを実施し、学生にアピールし、英語ないしは日本語で読書する学生の割合を増加させた点である（写真 2、写真 3)。

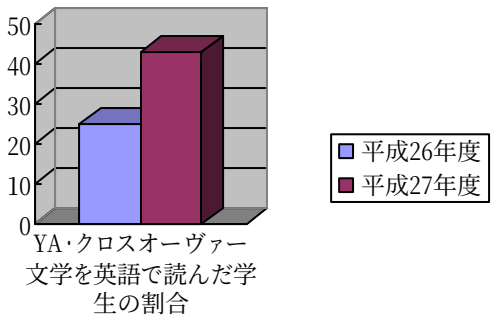
（写真１）

（写真２）

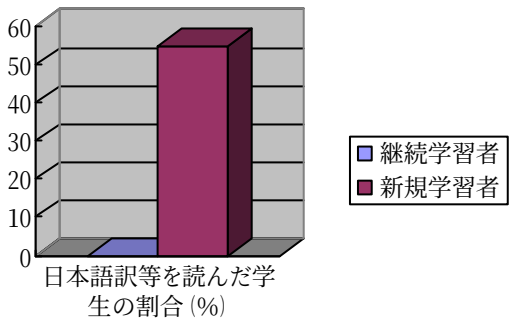
（写真３）

ウェブサイトは、a)初めて英語多読学習やヤングアダルト、クロスオーヴァー文学に触れる学生向けの導入のための情報と、b)継続学習者の日本語読書への移行を促すための、大学図書館に所蔵されている多読学習用書籍、英語のヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学の書籍、翻訳、所蔵リストからなるっている。このウェブサイト使用開始後の、平成 27 年度末のアンケート結果からは、興味深い結果を得ることができた。

アンケートの結果によれば、2 年目は英語多読学習を前年度に導入された 7 名の学生のうち、3 名が英語のヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学を手に取った。前年度 25%より多い、43%の学生が英語でヤングアダルト、クロスオーヴァー文学に触れたことになる。



しかし、このグループに関しては、研究開始当初の仮説に反して、英語多読学習が日本語翻訳作品の読書につながらなかったことが明らかになった。平成 28 年 1 月に行われたインタビューは、アルバイトと勉学の両立のため時間のない彼らが、一度英語で読んだものをわざわざ日本語で読む必要性を感じていないことを示す。



この結果については、彼らの英語読者としての成長に驚かされるとともに、生涯教育へとつながる読書を増やすために、「母語」の読書に移行させる必要があると考えた筆者自身の「学生は日本語の方が読みやすい」という固定観念を浮き彫りにすることになった。この結果は、筆者に必ずしも母語による読書だけが、生涯学習へとつながっていくわけではないことを思い知らせてくれた。

一方、平成 27 年度になり筆者担当のクラスに配属され、初めて英語多読学習に触れることになった学生が、英語で読んだ書籍を日本語で読む確率は非常に高かった。27 年度末のアンケートに回答した学生のうち、当該の年度から新たに英語多読学習を始めた 11 名の学生のうちでは、6 名（約 55%）が英語で読んだ書籍を日本語で読む傾向にあることがわかった。これは、翻訳図書に全く手の伸びなかった継続者の学習者とは大きく異なる結果であり興味深い。この違いは、「英語で読む」という習慣が確立されていない段階で、翻訳等を日本語で読むことを奨励されたため、学生が「より読みやすい」日本語での読書にひかれて行った結果であろうと考えられる。

このアンケートの結果から、英語多読学習経由で、母語による読書量のみを増やすことを目標とするならば、英語で読む習慣が定着する前に、日本語で読むオプションを学生に与えることがより効果的であるといえる。しかし、生涯教育は必ずしも日本語による読書のみにつながっているわけではない。したがって、この研究の結果としては想定外であったが、英語で読み続けることを、否定する必要はない。

（3）今後の展望

ただし、2 年間プロジェクトに参加した学生の、将来的な読書習慣、特に英語による読書習慣の維持については、アンケート調査やインタビュー結果を分析して、困難であると思われる。平成 28 年 1 月のインタビューから、2 年間継続してプロジェクトに参加した学生 7 人のうち、6 名が大学入学以前に「朝読書」を経験していた。うち、朝読書を経験しなかった人物を含めて 2 名が、まだ日本語でも英語でも読書習慣がついているとは感じていなかった。残りの 5 人は少なくても、その時点では日本語の読書習慣はあると考えていた。

本プロジェクトは、既に「朝読書」によって読書習慣がある程度までついていた学生に対して、その習慣を英語授業内の多読学習という枠を与えて「生きながらえさせる」時間と空間を大学内で提供していた可能性が高い。実は、インタビューにおいて、このグループの学生 7 人全員が、「自主的に」英語多読学習を続けているわけではないと答えている。平成 26 年度にプロジェクトに参加し、27 年度は参加しなかった学生 6 人に対して行ったアンケート調査によれば、彼らのすべてが、平成 27 年度は英語多読学習を辞めてしまっていることがわかった。この結果から、2 年間プロジェクトに参加し、多読学習を続けてきた学生も、教員側からの呼びかけや、時間の提供がなくなると、読書をしなくなる可能性がかなり高い。特に（2）で言及した通り、彼らのうち 3 人は「英語でのみ」

ヤングアダルト、クロスオーヴァー文学を読んでいたことからも、残念ながら英語多読学習という英語クラスにおける取組の必要がなくなると、読書習慣も一緒に無くなってしまうかもしれない。

2年間のプロジェクトは、「多読 to 読書」をとおして朝読書で培われた読書習慣を「生きながらえさせる」ことは不可能ではないことを示した。しかしながら、このプロジェクトから教育機関を離れてからも、ひとりの大人が読書をつづけるためには、継続的な外部からの働きかけが必要なこともまた、明らかとなった。この「外部からの働きかけ」を大学卒業後に、社会の中で「誰が」「どのように」行い、彼らを生涯「読み続け」、「学びつづけること」に結び付けていくのかを模索することが、今後の重要な課題といえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

（１）荒木陽子、「『多読 to 読書』プロジェクト 2014――英語多読学習を介した日本語読書習慣作りにむけて――」『人文社会科学研究所年報』第14号（2016）： 61-73。敬和学園大学人文社会科学研究所、査読なし。

（２）荒木陽子「E. Pauline Johnson: 生き残りの戦略」『北海道アメリカ文学』第31号：75-89。日本アメリカ文学会北海道支部、査読あり。

（３）Yoko ARAKI, “The Gothic in Contemporary Short Fiction from Nova Scotia,” *Japanese Review of Canadian Literature* 22 (2014): 31-48. 日本カナダ文学会、査読有。

（４）荒木陽子、『児童・ヤングアダルト文学者』が描く『高齢者』」バッジ・ウィルソンのクロスオーヴァー短編小説」第 11 号(2013)：191－204。敬和学園大学人文社会科学研究所、査読なし。

〔学会発表〕（計５件）

（１）Yoko ARAKI, “Homecoming?: Visiting Grandparents in Atlantic Canada in Alistair MacLeod’s “The Return” and Budge Wilson’s *Oliver’s Wars*,” Paper read at the 9th Thomas Raddall Symposium of Atlantic Canadian Literature on 9th July 2015 at Acadia University, Wolfville, NS, Canada.

（２）荒木陽子、「ポーリーン・ジョンソン：生き残りの戦略」日本アメリカ文学会北海道支部大会（2014年6月28日、於・藤女子大学）および日本アメリカ文学会第 53 回全国大会〈2014年10月5日、於・北海学園大学〉。

（３）荒木陽子、「現代ノヴァ・スコシア文学にみるゴシック、グロテスクに関する一考察」日本カナダ文学会第 32 回年次研究大会（2014年6月14日、於・中京大学）。

（４）荒木陽子、「リン・コーディの短編小説に関する一考察」日本アメリカ文学会東北支部3月例会（2014年3月15日、於・東北大学）。

（５）荒木陽子、「クロスオーヴァー小説として読むバッジ・ウィルソン著、ハイストリートの家」日本アメリカ文学会東北支部3月例会（2013年3月2日、於・東北大学）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
荒木　陽子　（ARAKI YOKO）
北海道情報大学・医療情報学部・准教授
研究者番号： 90511543

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：